

万葉の宴

——大伴家持の館の集宴歌と古歌の条件——

近 藤 信 義

はじめに

延暦十四年四月十一日、桓武天皇曲宴歌に、古歌をもって問いかげ百濟王明信に和すことを命じた宴歌のいきさつは、すでに前著（『万葉遊宴』第二部）に記したところであるが、依然として何故に古歌が突然登場してくるのかその理由を明確にし得ていない。古歌が用いられるにはそれなりの理由があつたことであろうし、あるいは古歌には宴歌に登場する条件があるものなのかも知れない。

ここでは万葉集において、古歌がどのように扱われているか、これも前著（同右）において検討してみたが、なお、より丁寧に個別の歌がどのような流れの中にあるものかを詠み込む必要のあることを感じている。そこで、若干前著の内容を要約した上で、今回の問題を取りあげてみたい。

万葉集にはA、「古歌集」あるいは「古集」とあつて、いわゆる万葉集の原資料として扱われているものと、B、宴歌の中にあつて「古歌」であることを題詞または左注によって記される場合とがある。それらのあり方でとりわけ

Bに注目したい。次の(1) (5)はそのBに該当する。

万葉集には「宴誦歌」「誦詠」「伝誦」「誦習」「誦経」などの例を見ることが出来る。さらに「宴誦歌」「誦詠」「伝誦」の例は、それらの歌が殆んどの場合宴席と考えられる。「誦」とは曲節を伴ってヨム(発声する)ことであって、したがって場に応じ、時に応じて即妙に諳んじられていた状況があったことを伝えている。その場合「誦」字に注意してゆくと「古歌」を伴っている場合がいくつも見出され、それは宴において古歌(概念的にはフルウタと解されるが、題詞左注などでは音読みが通常か)が登場する場合の表され方をも伝えているようだ。例えば(以下五例全て万葉集)、

(1)「右二首……若疑當時誦之古歌歟」 (①八三左)

(2)「……併當所誦之古歌」 (⑮三五七八題)

(3)「當所誦詠古歌」 (⑮三六〇二題)

(4)「古歌一首 大原高安真人作……」 (⑰三九五二)。右一首、伝誦僧玄勝是也(左注)」

(5)「……古歌(⑰三九九八)。……右一首、伝誦主人大伴宿禰池主云尔(左注)」

右の(1)は作歌に対しての疑問が左注となって表されているわけで、この歌の題詞に「遣長田王于伊勢斎宮時山辺御井作歌」とある。つまり「山辺御井」での歌としては内容に不整合を感じていることを示しているわけである。それと同時に一方ではこの左注によって、旅の途次作歌の場合(おそらく宴)があり、そうした場合しばしば古歌が誦せられ、披露される状況があったことを我々には知らされているのであって、したがって注者もそうした理解に基づくが故に「當時誦之古歌歟」なる左注の記入となっていると考えられる。(2)と(3)は互いに呼応する関係にある題詞であって、遣新羅使の航海の途次の作歌を記録(2)すると同時に、所どころで誦した古歌を十首記録(3)し

たものである。旅中において作歌の場（おそらく宴）があり、その中で古歌が誦せられる機会のあったことを伝えるという意味では、(1)と等しく考えることが出来る。加えて「當所」とはその地に所縁することを基本としていることであろうから、古歌の地名を入れ換えて披露するということもあったらしいことを伝えている。

(4)と(5)は共に宴席の最中に古歌が誦せられていることを具体的に伝えている例である。(4)は越中の国守大伴家持の館においての宴歌を記録している中のものであるが、宴に集うた人々が歌を披露してゆく最中に、僧玄勝がこの古歌を誦したと伝える。この場合どのような事情があつて、この大原高安真人の歌が披露されているのか、おそらく何らかの必然がこの宴の雰囲気の中にあつたには違いないのだが、そのことは定かではない。しかし、宴において古歌はかなり重要な役割を担っていたことを我々は知らせていることになる。この点を確認したい。

(5)は大伴池主の館での宴歌四首を記したもので、題詞に「宴歌併古歌四首」とある。この古歌にあたるのが「石川朝臣水通橘歌」であつて、伝誦者は主人大伴池主であることを記している（なお、水通は伝未詳）。この場合、古歌が登場してくる必然は何か。宴歌の素材がホトトギス、五月、玉と詠まれる流れの中から導かれてくるものであろうことが想像はできるのだが、この点の確認は重要であろう。

以上、個別の事例のあることを要約したが、ここでは、(4)の場合を検討してみたい。

一、「をみなへし」の流れ

大伴家持は天平十八年六月に越中の守に任ぜられ、「閏七月」(⑩三九二七題詞)に着任した。越中における家持の宴会の最初の記録が次の十三首の歌群である。国守の館に何人の人々が集まったのか、全体像は分からないが、歌が

残されているのは五人、およそ時間の経過に従って記録されていると見ることが出来る。しかし、歌の流れを見ると、ある切れ目を感じられ、その両者をつなぐ位置に「古歌」があると考えられる。

八月七日の夜に、守大伴宿禰家持の館に集ひて宴する歌

a 秋の田の穂向き見がてり我が背子がふさ手折りけるをみなへしかも ①七三九四三
右の一首、守大伴宿禰家持の作

b をみなへし咲きたる野辺を行き巡り君を思ひ出たもとほり来ぬ ①七三九四四

c 秋の夜は暁寒し白たへの妹が衣手着むよしもがも ①七三九四五

d ほととぎす鳴きて過ぎにし岡辺から秋風吹きぬよしもあらなくに ①七三九四六
右の三首、掾大伴宿禰池主の作

右の三首、掾大伴宿禰池主の作

e 今朝の朝明秋風寒し遠つ人雁が来鳴かむ時ちかみかも ①七三九四七

f 天離る鄙に月経ぬ然れども結ひてし紐を解きも開けなくに ①七三九四八
右の二首、守大伴宿禰家持の作

右の二首、守大伴宿禰家持の作

g 天離る鄙にある我をうたがたも紐解き放けて思ほすらめや ①七三九四九
右の一首、掾大伴宿禰池主

右の一首、掾大伴宿禰池主

h 家にして結ひてし紐を解き放けず思ふ心を誰か知らむも ①七三九五〇
右の一首、守大伴宿禰家持の作

右の一首、守大伴宿禰家持の作

i ひぐらしの鳴きぬる時はをみなへし咲きたる野辺を行きつつ見べし ①七三九五一

右の一首、大目秦忌寸八千島

古歌一首大原高安真人の作、年月審らかならず。ただし、聞きし

時のまにまに、ここに記載す。

j 妹が家に伊久里の杜の藤の花今来む春も常にかくし見む

①七三九五二

右の一首、伝誦するは僧玄勝これなり。

k 雁がねは使ひに来むと騒くらむ秋風寒みその川の上に

①七三九五三

l 馬並めていざ打ち行かな渋谿の清き磯廻に寄する波見に

①七三九五四

右の二首、守大伴宿禰家持

m ぬばたまの夜はふけぬらし玉くしげ二上山に月傾きぬ

①七三九五五

右の一首、史生土師宿禰道良

宴はその集う人々によって性格づけられるものである。この宴の場合、a bに取りあげられている「をみなへし」が宴の主題として扱われていることが分かる。宴の主客は通常招かれた人であり、宴の主人に対する挨拶が冒頭となる。その場合主客は主人の心遣いを見出して、先ずはそれを主題としての歌が詠まれる。そこに儀礼的ながら謝意が籠められる。この場合、その位置にあるのが守家持ということになるのだが、題詞には「守大伴家持の館」とあって家持が主人の位置にあって最初に謝意を示している。歌の内容から判断するとこの折りの宴には「をみなへし」が飾られていた。その「をみなへし」を宴の席に運んできたのは、「掾大伴宿禰池主」のようである。するとこの宴の場合、館の主が、客である池主へ「をみなへし」を摘み取ってきたことに対する謝辞が述べられ、併せて上二句に掾官

の領内巡視の職務ぶりを評する讃辞⁽²⁾を籠めたところから始まったとみるべきなのであろう。

「をみなへし」が池主によって「ふさ手折り」もたらされたにつけては、すでに前提としてのことからと歌が存していたことを思わしめる。「をみなへし」は後期万葉集において取りあげられてくる歌材であって、憶良の秋の七種歌に取りあげられたのは比較的早い時期のものである。集中、「娘部思」「美人部師」「佳人部為」「姫部志」と文字化されここには女性寓意がすでに籠められているといえるが、歌自体に例えば「をみなへし咲沢野への眞葛原いつかもくりて我が衣に着む」(⑦一三四六)、⁽³⁾「吾が里に今咲く花のをみなへしあへぬ心になほ恋ひにけり」(⑩二二七九)などにその寓意性は明瞭に表れている。

b以下の池主歌の三首を見ているとここにはある意図が潜んでおり、したがって家持の館に「をみなへし」を届け たのも既に意図的なシナリオに従ったものと見られる。aの家持歌の「をみなへし」と池主歌のそれとはすでに同一の花を歌っているにも関わらず、その意図、もしくは関心は相当の開きが見える。bの表現の特徴は「をみなへし咲き」の二句目にまで及ぶ詞の喚起力である。これは、

をみなへし咲野^{さきの}におふる白つつじ知らぬこともち言はれし吾^わが背^せ ⑩一九〇五

ことささらに衣^{ころも}は摺^すらじをみなへし咲野^{さきの}の萩^{はぎ}に匂^{にお}ひてゆかむ ⑩二一〇七

の歌に見られるように、枕詞的な表現に特色がある。完全に枕詞と言いつけるほど「咲野」は地名化しているものではなく、しかし花の実態が詠まれているとも言いつけるほど「咲野」は地名化しているものではない。こうした余韻のようなびきをbは持っている。さらに、家持にとって「をみなへし」には、触れられれば思い起こされる花としての隠喩がある。

をみなへし咲沢^{さきさば}に生^おふる花かつみかつても知らぬ恋もするかも ④六七五

右の歌は、題詞に「中臣女郎の相伴宿禰家持に贈る歌五首」とあって、その第一首目の歌である。中臣女郎は家持の

青春時代の恋歌を彩る女性達の一人であって、おそらく家持より年上と思われる。この「をみなへし」の用い方も枕詞的要素と花の実態とが含まれている表現であり、その花には女性譬喩（この場合は若き家持を取りまいている複数の女性達）が見出され、「花かつみ」なる私（女郎）と対比していることになる。家持はかつてこのような「をみなへし」歌を受け取っている。

bの「をみなへし咲く」は景の表現であるが枕詞表現と重ねられたところにある意図が見出される。また、四句目の「君」は、aの「吾背子」に対しての君であって、そこには男性同士が一对の恋人としての姿をとっての表現を見せている。したがって、その手法として枕詞的詞句の関わらせ方と、「をみなへし」に籠められている隠喩性と、その双方の表現要素を組み入れて、家持の女性への関心を誘い出そうとしていると見られるのである。こうした家持の遍歴と歌とを踏まえた上での池主の「をみなへし」詠は意図するところが明かと言えるだろう。

こうした池主の家持に対する親しさは、互いに既知の間柄であったことによる。両者は大伴の姓を持つ一族と考えられるが血縁的關係は不明である。ただし選叙令の規定では国司の役職には「三等以上の親」⁽⁵⁾の關係は禁じているから、それは遠いものであったかと考えられる。ただ、家持越中の守就任時には既に池主は掾官として越中にあつた。

この両者は先立つ天平十年（七三八）十月「橘奈良麿結集宴」の折りに同席して居ることを万葉集には記している。家持内舎人時代（二一歳ごろ）であり、以後家持の青春歌謡歌の時代となる。おそらく池主は若干の年長と考えられるが、都における交友は始まっており、大伴氏の若き棟梁家持をよく知る存在としてあつたと言ふことができる。

bは右に見たように家持の女性想起を促す意図を潜め、その歌材としての「をみなへし」をその契機として家持を刺激しようとしていると見ることができ、次のc dもその意図はより鮮明に表れていると見ることができ。

cは赴任先の越中の風土の特異を詠み込んだもので、「妹が衣手着むよしもがも」は旅中の寂しさに同情した趣を

醸している。この池主は先任者としての経験と自己の実体験に基づく労りを見せてはいるが、そこに家持の身辺不如意の哀感を引き出そうとしている意図が見えていくべきであろう。

dも家持に対する同情が表れていることはcと等しい。特に五句目の「よしもあらなくに」は妹を求めてもその「よし」の無いことを詠んでおり、cdを連続的に捉えないとこの哀感をそそる情は導けない。しかし、dにおいて意図的なのは上三句にある。この「岡辺」は、館の西に位置する二上山を指したものと考えられ、その位置が異界と接し季節の交代ををもたらす山としてシンボリックに捉えるとともに、既に秋八月のこの時季にあえて「ほととぎす」の去来を取りあげた意図は家持の都への愛着を呼び起こし、越中の地にあつての独り身の意識を募らせようとしたところにあつたと考えられる。「ほととぎす」は既に京にあつて家持のこのむ歌題（⑩三九一一―一三・三九一六―三九二一）となつていた。池主はこの家持の嗜好に触れているのである。（以降、越中の夏のホトトギスへの執着は家持歌を特色づけることとなる。）

右の池主に対して家持歌は冷静さを持って、その二首（cd）の感情をかわす方向で応じている。eは詞句としてはcの上二句およびdの四句をつなげているが、モチーフはeとd、fとcが対応している。すなわち、秋風とともに募る妹不在の侘びしさを「よしもあらなくに」と歌いかけているdに対して、「雁が来鳴く」（蘇武の雁信の故事を踏まえて）こと、即ち妹からの来信が間近であること、すなわち侘びしさへの配慮は無用と応じているのである。また、このed間には「ほととぎす」と「雁」との対応の中に季節を交代させる「岡辺」を軸に、去るもの訪れるものをイメージとして詠み込んでいるのである。「とほつひと」は「獵道」に用いられた前例があつて、この場合も枕詞と考えるべきであろうが、この歌中の印象としては家郷の妹の映像が描かれているように思われる。

fは、cが妹不在への同情をあからさまに歌いかけたのに対して、京の妹との堅い約束を表して、情に絡めた誘い

を明瞭に断っているのである。この家持歌二首には、妹との紐帯の強さが表わされていると見ることができ、宴歌としては異様に固い。

二、葛藤

次のg池主歌、h家持歌は葛藤を見せた所である。特にhはg歌に対して忌避的感情を籠め、宴席に緊張をもたらすこととなった。

gは注釈の揺れるところで、その原因は二句目の「われ」と五句目の「おもほすらめや」の主語の取り方にある。この解釈には「……池主は、自分のようなものでは、(家持が)紐を解き放す気にもなれずまいと、ちょっと皮肉っていっている。」(武田祐吉『万葉集全注釈』⁽⁶⁾)が最も素直かつ簡潔と思われる。最近では橋本達雄の解説が諸説を整理しつつ要領を得ている。橋本は「(天離る)田舎にいる私を、／(あなたは)けっして／うちとけてお思いになつては下さらないのでしょね。」と口語訳をつけ、さらに【考】において「同じ『紐を解く』という言葉を用いながら、家持は妻を思って他の女性と関係しない意に用いているのに対し、これは気を許しくつろぐ意にとりなし、やや皮肉っぽく軽く答えたところが気転が感じられる。……」(以上、『万葉集全注十七卷』⁽⁷⁾ 有斐閣)としている。

万葉の宴
原則的に歌意は右の理解でよいと考えるが、宴歌の情の流れは微妙である。右の注釈書のいずれにも「皮肉っぽく」という、いわば歌意以外の情感に触れようとしているところがその微妙さへの接近と思われる。そうした多感・多情さをすくい上げようとしたのが、橋本全注にも取りあげている『萬葉集私注』⁽⁸⁾である。その「作者及作意」に次のようにある。

……ワレヲは実は池主自身のことを言ふのではなく、座に待する女性などの立場を、代って歌ったのではないかと思ふ。つまり、家持が京の妻を思ひ紐も解かぬといふ歌を聞いて、座にある美人どもが、私のような田舎者では、どうせ駄目なのでせうといふ気配を見て取って、池主が代って作ったのであらう。尤もその気配は実際といふよりも、池主がさう解釈したか、或は此の歌によってさういふ気配を作るやうに、あふり立てたとも見られようか。

宴席における気分をかなり具体的に解説しようとしている。ここには池主の帮間的要素を見出しているのであらうが、そこには宴席における性の交換的要素をおのずと説いていることになる。また、私注は、池主の家持への性的感情の仕掛けを見ていると思われる。

宴席歌に交差する性的情感を、ホモセクシャル（同性愛）な感情として見ようとするのが呉哲男（『万葉の「交友」―大伴家持と同性愛（一）』）である。当該歌の流れを次のように解説する。

10（当該f以下同）で「紐を解き」というのは、池主の7（e）・8（f）が家持の官能を刺激する歌であったことを示している。そして、「結ひてし紐を解きも開けなくに」といって、異郷の地の女性の誘惑をはねのけるだけの自己抑制の力があることを宣言している。これを聞いた一座の人々は興ざめたのではないかと思われる。そこで、池主が一步ふみこみ自らが誘惑者となって、京に残した妻のことなど忘れて、私を思っ下さいと誘ったのが11（g）である。それに対して、ほぼ10（f）と同じ内容をくりかえしたのが12（h）で、家持は誘惑から身を隠す立場に立っている。

呉のgまでの理解はその通りと思う。しかし、hが「家持は誘惑から身を隠す立場に立って」いるとするが、それは宴席歌が一座を融和するものとする前提に立ってはいないか。

宴席歌は必ずしも融和を成り立たせる為だけに作用しない。時に激情の交差する場も演出する。ここはその例として見うるところである。hはfと同じ内容をくり返したのではなく、gの誘惑的情感に激しく反発を示したと思えるのである。「思ふ心を誰か知らむも」は激情の奔る詞句である。橋本注釈に「宴の歌としては固苦しい」と評するよ
うに、一座に緊張をもたらしており、いわば池主の歌を拒んでいることになる。座の興ざめはここにも起こっている。
ここまでの八首の流れによって、二人が互いの情感の内部に入り込みすぎた歌の交差をそらそうとしたのがiである。「ひぐらしの鳴きぬる時」は宴の時の移りゆくことを表し、なお「をみなへし咲きたる野辺」は、この宴の主題
に戻ろうとする配慮のある歌である。この配慮が必要であったほどに家持、池主の両者の情は葛藤をはらむ場となっ
ていたのである。

三、古歌の条件と位置

iによって宴席の歌の流れの舵は行動的なモチーフへと切られてゆく。k1の家持歌はその素直な反応を見せていることになる。古歌の位置が八千島歌に次いで記載されるのはどのような意義をもつのであろうか。

宴席歌の流れの中で一座の人々は全く突然に古歌を「聞く」ことになったが、古歌が登場するにはそれなりの必然と縁があった。伝誦者は僧玄勝（伝未詳、国分寺の僧か）、作者は大原高安真人であったという。この人物は次ぎに見るように大伴旅人と交流があったことが知られる。

大納言大伴卿、新しき袍うへのきぬを撰津大夫高安王たかやすのおほきみに贈る歌一首

我が衣人あころもにな着せそ網引あびきする難波なにはをとこの手には触ふるとも

④五七七

歌の雰囲気から見ても両者はかなり親密な間柄であったことが知られる。また歌の前後の配列から推察すると、旅人の最晩年頃（天平三年七月没）の贈歌のようである。高安王は万葉集中さらに次のような記事がある。

高安王、包める鮒かなを娘子をとめに贈る歌一首 高安王は後に姓大原真人の氏を賜ふ

沖辺おきへゆき辺へにゆき今や妹がため我が漁すなごれる藻もふし伏束つかふな鮒

④六二五

この細注の部分は天平十一年四月三日の詔（続日本紀）で従四位上高安王が上表して臣籍に下り、大原真人の姓を賜った記事に符合する。また、天平十四年十二月に正四位下で「卒」したことが確認できる。

この日の僧玄勝が宴席に列する大きな動機は、父大伴旅人との縁を持つ高安王（或いは若き家持は面影を知る人であったとも考えられる）、かつ、既に故人である故に古歌となった歌を伝えることにあったことが考えられる。さらなる動機としては、歌中の「いくりの杜」が越中砺波郡石栗庄(10)（現礪波市井栗谷町）であったとすれば、新任の国守に伝えるべき歌(11)としての必然を加えることになる。

こうした要素をはらみながら玄勝は古歌を披露する機会を待っていたことが推測される。宴は右に見てきたように、家持に向けた池主の執拗と思える感情への刺激（呉前掲によれば伴氏の年長としての池主の鍛え方が意図されているとする）を家持が忌避的に応じた歌をくり返すことによって、緊張がもたらされていた。八千島の主題回帰をモチーフとする歌も、その状態からの融和を図ったものと考えられる。そこに古歌が玄勝によって挿入された。古歌は春の「いくりの杜」への讃め歌であるが、緩衝的役割を果たすことが期待されていたと考えられる。宴の場の外部にあって、しかも宴の主に無縁ではない人物の歌の挿入は、ある安堵感を創出する演技的要素をもつ歌の用い方と言うべきであろう。

歌の流れから見てもjはiの行動的なモチーフをつないでおり、めぐり来る春のつど藤の花を愛で「いくりの杜」

に通おうという愛着に、美しい景を見出すべき行動力への喚起がある。この古歌の挿入は、見事に効果を發揮したと見るべきであろう。k1は宴の中であって、jの歌が披露されるに及んで、越中の景勝が次々に話題とされたことが想像できる（藤の花に因めば以降の布勢水海遊覧詩の歌材の発端はここが原点かとも思われる）。したがって、kの「雁」がさわぐ「その川の上」は、宴において話題となったところの越中領内のいずれかの川と見るべきではないだろうか。諸注蘇武の故事に基づいて雁が飛び立とうとしている胡国の河辺と見なすが、e歌と類似したモチーフながら五句の「その川の上に」には雁の飛来する川のほとりを想定することも成り立つと考える。

1に至ってこの夜の家持が初めて国守として命令的位置に立った歌を詠出したと言えよう。部下の官人と馬を並べて行こうと歌う「洪谿」は国庁から海岸へ出て僅かな距離であるが、この夜の宴の話題は、この場から見れば四季折々の景の讚美があったはずであり、その心躍る景への期待が四・五句に表されており、したがって「清き磯廻に」と「寄する波見に」は「洪谿」において見るべき別々の景として受け止めるべきであろう。家持の気分が大きく回復されていることを窺わせる歌である。

mは終宴歌に相応しい。一首に二つの枕詞を配し、宴の時の移ろいを詠む。ちなみに旧暦八月七日の半月が西に沈むのは九時前後となる。国庁の西にある二上山は月の沈む山でもあった。

おわりに

右の事例は古歌を中心に見ると、宴歌の流れを変える役割を果たしていることに気付く。このことは古歌の効用を考えさせてくれる例となる。この場合、古歌は宴席の緊張を和らげたり、新たな気分の創出へと向かわせる。宴歌の

流れを変えることのできる方法として、活用できる。宴席のための智慧とも言える。ただし、この事例の面白さが冒頭のテーマである桓武の古歌をどれほど説明してくれるか、この一例のみでは未だ解決されないだろう。更に古歌の条件を見出す検討が必要であることを感ずる。

注

- (1) 家持の越中における歌生活の始発として諸研究家注目する故に論考多い。例えば、森淳司「万葉集宴席歌考」(美夫君志26 一九八二年三月)、遠藤宏「天平十八年八月七日の家持」(論集上代文学13 一九八四年三月)、大越喜文「天平十八年八月七日の宴―家持と池主」(国学院雑誌 一九九二年十月)等々。
- (2) 窪田空穂『萬葉集評釈』(全集所収 角川書店 一九六七年三月) 当該歌注参照
- (3) 丸山隆司「もうひとりの〈家持〉たち ―〈万葉集〉の生成①―」(藤女子大学国文学雑誌56 一九九六年三月)
- (4) 小野寛「女郎と娘子」(『大伴家持研究』) 笠間書院 一九八〇年三月
- (5) 橋本達雄『萬葉集全注卷十七』有斐閣 一九八五年六月
- (6) 武田祐吉『増訂萬葉集全註釈』角川書店 一九五七年四月
- (7) 橋本達雄 注5に同じ
- (8) 土屋文明『萬葉集私注』筑摩書房 一九七〇年二月
- (9) 呉哲男『古代日本文学の制度論的研究』第二章所収。ここには一九九五年以来論争された家持の〈交友〉論の論点が整理されている。おうふう 二〇〇三年三月
- (10) 森田平次『萬葉事實餘情』北隆館 一九三〇年六月(石川県図書館協会出版書として発行)
- (11) 鴻巣盛広『萬葉集全積第五冊』(大倉 広文堂 一九三四年十二月) 当該歌注参照

(二〇〇三年七月一六日受理、七月一六日採択)